

第44回 京都招待中学サッカー大会



TFA テクニカル レポート

「はじめに」

日頃より、十勝地区サッカー協会事業推進に多大なるご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。お陰をもちまして、今年度のU-14 関西遠征も計画通りに実施することができました。ここに遠征のまとめとしてレポートを作成致しました。

今回の遠征の課題と成果をあげましたが、これが全てではなく、改善しなければならないものは、この他にもありますが、このレポートを活用いただきながら、日々のトレーニングに活かしてもらえれば幸いです。

今回のメンバーはクラブチームから12名、中体連チームから8名の選手で構成しました。クラブと中体連の融合の中で一人ひとりがオン・ザ・ピッチでもオフ・ザ・ピッチでも全力を尽くしてくれたと思います。また、トレーニングや試合中に的確な助言をしてくださった柴田先生。トレーニングやゲームに集中できる環境を作ってくださった青山先生。十勝地区のトレセン活動に関わっていただいたスタッフの皆様。大会事務局の朝倉先生、京都府ダイレクターの瀬野さん、大会前日にサンガタウンでトレーニングマッチをしてくださった京都サンガF.C.ジュニアユースの山下さんなど、各関係者の皆様に感謝とお礼を申し上げます。

2025年度 十勝地区トレセンU-14 関西遠征担当

全体責任者	柴田	恭兵
監督	丹羽	優
コーチ	青山	拓矢

「大会の概要」

主 催 : 第44回 京都招待中学サッカー大会実行委員会

大会会場 : サンガタウン・洛西浄化・吉祥院・立命館中学校

参加チーム: 京都サンガ・京都北部・中河内・大阪市アカデミー・滋賀中体連
京都クラブ・京都山城・三重県・千葉中体連・岡山クラブ西
京都府・京都市・滋賀県・鳥取県中体連・十勝地区トレセンU-14

「十勝地区トレセンU-14のコンセプト」

★チームコンセプト

アタッキングフットボール〜2HIS〜 連続したプレーを繰り返す
「走る〜ハードワーク〜」 「ハイプレス」
「スピード」

優先順位を意識したプレー選択実行と観る・止める・蹴る・運ぶ・受ける・外すをトライする

★組織化された守備

- ビルドアップの始まりに対する守備(前線)
- 前進とボール保持に対する守備(中盤)
- フィニッシュに対する守備(自陣ゴール前)

★守備→攻撃切り替え【ポジティブトランジション】

- カウンターアタック
- 組織化された攻撃への始まり(攻撃移行)

★組織化された攻撃

- ビルドアップの始まり
- 前進とボール保持
- フィニッシュ

★攻撃→守備切り替え【ネガティブトランジション】

- プレッシング
- 後退(レプリエゲ)

★GP

- 積極的なプレー(ビルドアップに関わる)
- 観て伝える(いつ・どこを・何を?)
- DFとの連携

★組織化された守備

【前線】

○ボールを持っている高さ(位置)によってGPやDFラインから攻撃を組み立てる前(最中)にプレッシャーをかける。相手コートはプレッシャーをかけ続ける。プレスバックも含めて自陣にボールが入るまで自分たちからボールを奪いにくい守備をする。

【中盤】

○ボールを前進させない。ボールの奪い所基本ベース①サイドバック②ボランチ③サイドハーフを明確にしてボールを奪う。またはボールロストを誘発させる。

【自陣ゴール前】

○4-4-2のシステムの中で4-4-(1-1)のDFラインと中盤の計8枚がブロックを徹底する。ペナルティエリア縦16.5mと横33m+周辺5mからは中央突破とミドルシュートを警戒しながら体を張る。相手のサイドハーフのクロスに対してはサイドバックではなくサイドハーフが管理できるようにする。

★守備→攻撃切り替え【ポジティブトランジション】

【カウンターアタック】

○ボールを奪ったらそのまま素早い攻撃を仕掛ける。

【攻撃への移行】

○カウンターを実行せずにボールポゼッションする。(ボール保持)

※ボールをクリアする場面や、再び奪い返される場面を除けば、必ずこの2つのアクションをチーム全体で行う。

★組織化された攻撃

【ビルドアップの始まり】

○ボールを持っている高さ(位置)によってGPやDFラインから攻撃を組み立てる。4-4-2のダブルボランチを含む6枚またGP含む7枚でビルドアップを形成する。サイドハーフは極力ビルドアップに関わらないようにする。(固定)

【前進とボール保持】

○ボールを敵陣へ前進させたり失わないようにする。相手ゴールに向かって最短最速を目指しながら相手のストロングの場所をサッカーを展開しないように相手のウィークの場所または、自分たちのストロングを生かしながら攻撃する。縦パスを常に狙いながら、相手センターバックを動かすパス(背後・ギャップ・ライン間)またはドリブルを実行する。2トップのうち一人が基本的に相手センターバックを固定し、もう一人が最終ラインの背後を常に狙っておく。

※約束事として、ビルドアップ時にも関わるが、相手のファーストラインを超えたら2トップのうち一人が背後に抜け出す。全員に言えることだが、チームコンセプト「走る」にもある通り、ボールホルダーを追い越す動き、ビハインドサポートの動き徹底。

【フィニッシュ】

○敵のゴール前で可能になる。最後は「罠」なので、数的不利の状況があったとしても突破することを忘れない。

①中央でコンビネーションから出す。②サイドを突破してクロス上げる。③裏へ抜けるスルーパス。④ドリブル突破→シュート

★攻撃→守備切り替え【ネガティブトランジション】

【プレッシング】

○ボールを失った後に素早くプレスをかけて奪い返すプレッシング。ボールを奪われた選手と周辺のプレイヤー。3秒で取り返す。攻撃時にはボールホルダーを追い越す動きまたは前方のサポートとビハインドサポートを徹底する。

【後退(レプリエゲ)】

○すぐに奪い返すのではなく、一度下がって守備陣形を整える後退(レプリエゲ)。カウンターがかなりそうな場面や自分たちの中盤のラインがブレイクされた時には、一早く自陣コートへ戻り4-4-2(4-4-1-1)を形成する。

★GP

○積極的なプレー(ビルドアップに関わる)

○観て伝える(いつ・どこを・何を?)

○DFとの連携

Try Active!
できるだけいいではなく
やろうとするかしないかだ

「大会に向けた準備」

5月より、十勝地区のトレセン活動を行い、地区だけでなく道東トレセンマッチや北海道の交流大会に各選手が参加し、10月13日(月)に本遠征のメンバー選考会を行った。12月にU-15釧路で行われた、全道選抜フットサル大会に参加し、その後2回の関西遠征トレーニングを経て京都招待に向かった。初めての関西遠征ということで、チームとしての最大のテーマは「次年度以降も呼んでもらえるようにオン・ザ・ピッチでもオフ・ザ・ピッチでも全力を尽くす」であった。もちろんやるからには勝利を目指しながら、ただ「個」としてどれだけ成長できるかがトレセン活動では一番大切だということを再確認した。チームとしての約束事やサッカーの原理原則を確認し、チームコンセプトである「走る〜ハードワーク〜」「ハイプレス」「スピード」にフォーカスしながらトレーニング

「大会に向けての課題」

＜守備＞

- ・ボールにアタックできていない。
- ・スタートポジションが悪い。
- ・連続した守備ができていない。
- ・攻撃から守備への切り替えが遅い

＜攻撃＞

- ・前を向くための準備ができていない。
- ・ゴールを見てのプレーが少ない。
- ・マークを外す動きができない。
- ・連続した攻撃ができていない。

＜GP＞

- ・構えが不十分で、シュートに備えられていない。
- ・移動の方法や移動する場所が悪い。
- ・キャッチングの基本技術の習得が不十分である。
- ・DFと連携し、事前に展開を予想することができない。
- ・積極性が足りない。

「フットサル大会&トレーニング」

12月6日（土）・7日（日）

全道地区U-15選抜フットサル大会【ウィンドヒルくしろスーパーアリーナ】

グループリーグ VS 釧路A 2-1

相手チームは北海道コンサドーレ釧路の3年生中心のメンバーであった。
十勝地区トレセンU-14としては今大会が選考後初めて顔を合わす場となった。
フィクソが3人目の動きで攻撃に関わり得点を奪うことができた。
相手より切り替えを早くすることやゴール前の守備を粘り強くでき勝利することができた。

グループリーグ VS 札幌R 8-5

相手チームは個人技術が高く、人とボールが動いてくるチームであった。
GPの準備不足やゴール前の粘り強い守備がなく0-4スタートであったが、
そこから背後にアクションを起こすことやポジションにこだわらず連続した
プレーを繰り返した結果、5失点はしたが、8得点を奪い逆転勝利することができた。

決勝トーナメント準決勝 VS プレイフル函館 2-1

2日目は準決勝からのスタートになった。相手チームは函館のクラブチーム。
個人技術も高く、日常からの積み重ねたチーム戦術も高かった。
カウンターでフィクソが3人目の動きで攻撃に関わり先制点を奪うことができた。
その後、相手の猛攻を浴び、同点に追いつかれたが、粘り強い守備と相手のミスにも
助けられ、再びカウンターで2点目を奪うことができた。勝利につながった。

決勝トーナメント決勝 VS 釧路A 1-5

予選リーグでは2-1で勝利していた相手だったが、ミスも多く、1対1で負けて
しまう場面や数的不利の状況で飛び込んでしまう場面もあり、5失点で敗戦した。

本大会を通して、フットサルというサッカーとは違った要素がある大会ではあったが、
守備と攻撃の個人戦術を確認するうえでは、とても良い大会になった。
全体的にフットサル特有のアラの守備が深いところからの守備になってしまう
場面が多く、監督として声をかけることができなかったのが大きな反省点であった。
選手達は一生懸命にプレーしてくれて、選手間でコミュニケーションも取る場面が
見られたので、関西遠征に向けて前向きな大会であった。

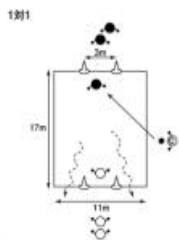
12月14日（日）関西遠征トレーニング1回目【南町中学校体育館】

守備

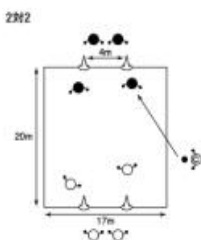
守備→攻撃の切り替え

W-UPで1対1の状況でどこまで寄せるかをデモを見せながら全体で確認

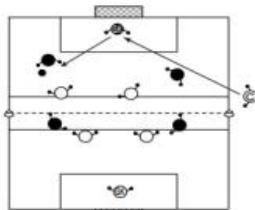
TR1



1対1 → 2対2

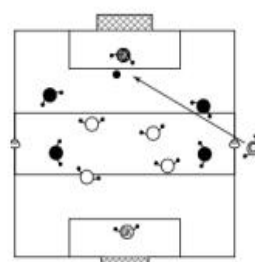


TR2



2対2 + 2対2 + GP

GAME



5vs5

オーガナイズ

- 大きさ: 17m x 11m → 20m x 17m
- 用具: ボール、コーン、マーカー、ピブス
- 方法: コーチからの配球でスタートとする。
コーチからの配球でスタート（コーチのボール状況によりポジションニング）とする。
①コーン間にシュートをする。
②上記①に加え、コーンの外側のドリブル突破もあり。

KEY FACTOR

- ファーストDFの質
- ボール状況に応じたポジションニング
- アプローチの質（ボールを奪う意識）
- 開合いを詰める
- 粘り強い対応
- チャレンジの優先順位（ボールを奪うチャンスを逃さない）
- コミュニケーション
- 攻撃の切り替え

オーガナイズ

- 大きさ: 35m x 20m
- 用具: ボール、ゴール、マーカー、ピブス
- 方法: コーチからGPに配球してスタートとする。
①セバレートとする。
②自陣にボールが入った時、守備側は一人進入して良い（プレスバック）。
③攻撃側も一人入って良い。

KEY FACTOR

- ファーストDFの質
- アプローチの質（ボールを奪う意識）
- 開合いを詰める
- 粘り強い対応
- チャレンジの優先順位（ボールを奪うチャンスを逃さない）
- コミュニケーション
- 攻撃の切り替え
- GKとの連携

オーガナイズ

- 大きさ: 35m x 20m
- 用具: ボール、ピブス、ゴール
- 方法: コーチからGPへの配球でスタートとする。
アウトオブプレーはGPからスタートとする。

KEY FACTOR

- ファーストDFの質
- アプローチの質（ボールを奪う意識）
- 開合いを詰める
- 粘り強い対応
- チャレンジの優先順位（ボールを奪うチャンスを逃さない）
- コミュニケーション
- 攻撃の切り替え
- GKとの連携

トレーニング反省

相手のミスを待つのではなく、ボールを自ら奪う、味方と奪うという意識を距離と予測、プレスバック等で持たせることが重要。相手コートは抜かれてもいいからプレッシャーをかける、1度追いで終わらず、2度追い、3度追いと連続して守備ができるようなコーチングが重要。

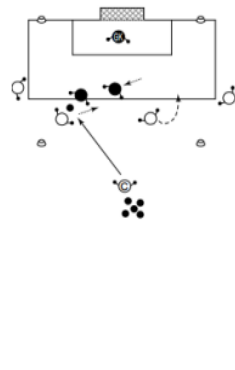
12月21日（日）関西遠征トレーニング2回目【南町中学校体育館】

攻撃

攻撃→守備の切り替え

W-UPで2対2でコーンゴールを置き、ゴールを見てプレーするように全体で確認

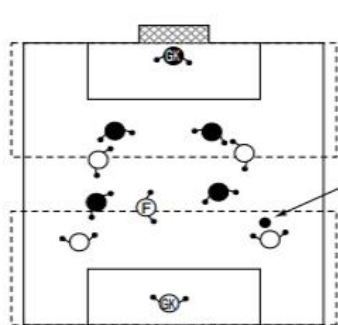
TR1



2対2 + 3サーバー + GP
3対3 + 1サーバー + GP

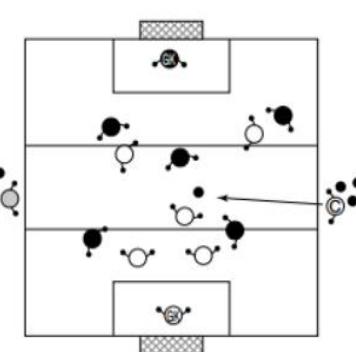


TR2



4対4 + 1F + GP

GAME



6vs6

オーガナイズ

- 大きさ: 15m x 11m → 15m x 20m
- 用具: ボール、ゴール、マーカー、ピブス
- 方法: 中央サーバーはコーチが行う。
攻撃側はゴールを目標とする。
守備側はボールを奪ったサーバーにパス。
パスが通ったら押し上げたら攻撃交代。
GPがシュートをキックした時はサーバーにパスで攻撃交代。
※2対2はサーバーも含めてオフサイドあり。

KEY FACTOR

- 攻撃の優先順位（チャンスを逃さない）
- 四隅を狙う（ボールの置きどころ）
- ボールをしっかりとらえ、強く蹴る
- 動きながらのコントロールの質
- コントロールからシュートまで速く
- 動き出しのタイミング（マークを外す）
- オフの動き
- リバウンドの意識

オーガナイズ

- 大きさ: 35m x 20m
- 用具: ボール、ゴール、マーカー、ピブス
- 方法: コーチから配球してスタートする。（配球でゴールへ向かわせる）
攻撃プレイヤーは中央付近でプレーする。
攻撃プレイヤーは2タッチを目安にプレー、シュートあり。

KEY FACTOR

- 攻撃の優先順位（チャンスを逃さない）
- 四隅を狙う（ボールの置きどころ）
- ボールをしっかりとらえ、強く蹴る
- 動きながらのコントロールの質
- コントロールからシュートまで速く
- 動き出しのタイミング（マークを外す）
- オフの動き
- リバウンドの意識
- 攻撃の切り替え

オーガナイズ

- 大きさ: 35m x 20m
- 用具: ボール、ゴール、ピブス
- 方法: フォーメーションは1-2-1-2とする。
コーチの配球でスタートする。

KEY FACTOR

- 攻撃の優先順位（チャンスを逃さない）
- 四隅を狙う（ボールの置きどころ）
- ボールをしっかりとらえ、強く蹴る
- 動きながらのコントロールの質
- コントロールからシュートまで速く
- 動き出しのタイミング（マークを外す）
- オフの動き
- リバウンドの意識
- 攻撃の切り替え

トレーニング反省

TR1では3サーバーは難しいのと、獲得させたいものが複数になってしまうことからなしにした。数的同数からどのように数的有利を作るかを明確に伝えることが重要。
TR2でオーガナイズ次第で切り替えのトレーニングにもなることを再確認できた。

「十勝地区トレセンU-14の戦い」

トレーニングマッチ VS 京都サンガF CジュニアユースU-13

6-13 負け 【天候：曇り ピッチ：人工芝】 30分3本 サンガタウン

大会前日に京都サンガF CジュニアユースU-13とトレーニングマッチを行った。守備の奪い所を確認し、試合に臨んだが、相手のシステム4-3-3に対し、十勝は4-4-2、相手のアンカーをフリーにさせてしまい、前線からのプレスも個人個人になってしまい、チームとしての守備が上手くできず、失点を重ねてしまった。2本目はボランチを縦関係にして、相手のアンカーにマンツーマンで守備をすることにより、前線からの守備が少しはまり、得点につながった。また、相手の背後をシンプルに狙い始めてからは、カウンターで連続得点することができた。3本目は相手も更に動いてきて、1プレー1プレー、十勝の立ち位置を見られ、常に逆をとられる展開になり、再び失点を重ねてしまった。一つ下の学年とはいえ、ナショナルトレセン7名を要するチームと対戦でき、たくさんの課題が見つかるゲームとなった。北海道、十勝地区では感じるこのできない強度でゲームが展開

グループリーグ VS 京都市 0-1 負け 【天候：雨 ピッチ：クレー】

初戦ということで、立ち上がりはノーリスクで試合に臨むことを確認した。とくに雨でピッチがクレーということもあり、サッカーをすること自体が難しいと感じながらのゲームであった。シンプルに相手DFラインの背後にボールを落とすこと、球際で負けないことにフォーカスしながらゲームに入った。難しいピッチ状況の中でバックパスを奪われてクロスから失点。中盤を支配される時間もあったが、ほぼ互角の戦いが続き、前半を0-1で折り返した。後半は横パス、バックパスをしないことを徹底して、より前を目指すようになってからはゴールまで何度も迫った。しかし最後まで得点は奪えず、0-1で敗戦。相手は難しいピッチ状況でも「止める・蹴る」の質が高かった。

グループリーグ VS 滋賀県 0-5 負け 【天候：雨 ピッチ：天然芝】

2試合目は県トレセン相手に臨んだ。相手のシステムは4-3-3。サイド攻撃を特徴とするチームであった。キックオフから怒涛の攻撃を展開され、全てのスピードに違いがあり、前半は圧倒された。後半は一人ひとりの守備の距離を詰めて、囲ってボールを奪えるようにハーフタイムで指示し、1度追いで終わらないことも伝えた。後半は前半に比べて、高い位置で奪える回数も少し増えたが、人とボールも連続で動いてくる相手に対して、ゲーム体力や個人戦術で上回られ、0-5で敗戦。相手のアンカーは献身的で常に相手の立ち位置を確認し、相手の逆をとり、ボールを供給していた。サイドチェンジのスピードも早く、両サイドハーフ共に中を見せておいての縦に突破が非常に優れてお

グループリーグ VS 鳥取県中体連 4-0 勝ち 【天候：晴れ ピッチ：人工芝】

大会2日目を迎えた。初日2敗スタートであったが、チームとしての雰囲気は悪くなかった。初日の課題を明確にしゲームに臨んだ。DFラインから更に押し上げて、中盤、前線へとコンパクトにしながらハイプレスをかけられるように選手に声をかけた。2トップ、サイドハーフ、ダブルボランチの6人が1度追いで終わることのないように、最低2度追い、そしてFWは3度追いまでテーマにあげた。選手が実直に動いてくれた結果4-0で勝利することができ、京都招待初の1勝となった。しかし、勝利の反面、課題も常に出てきて、守備の際にバックペダルになる選手も多く、背後をとられる場面や、次の動作に遅れる場面も多々あった。エリアや相手選手の狙っていることを予測した半身の体勢になることやゴール前でのシュートブロックは足を揃えることが次のゲームへの課題となった。

グループリーグ VS 京都府 1-10 負け 【天候：晴れ ピッチ：人工芝】

グループリーグ最終戦。相手は優勝候補のチームということで、どこまで通用するのか試合前から楽しみであった。相手も十勝もシステムは4-4-2。鳥取県に対して上手くいったことを継続するとともに、バックペダルなどの課題も明確にしたうえで試合に臨んだ。キックオフからハイプレスで相手DFに向かった。相手のビルドアップ時にボールを奪い、シュートで終わる攻撃を10分間はできたが、それ以降は相手のペースになり、予選3試合で感じていない、または今までのサッカー人生で感じていないプレー強度で全てのプレーで翻弄された。相手はビルドアップ時にサイドハーフが内側の立ち位置をとり、中盤の枚数を増やし、サイドバックがより高い位置をとってくるシステムに可変してきた。少しでもギャップが空けばダイレクトで通ってきて、十勝の守備が形成されていなければ手数をかけずに仕掛けてきた。終わってみれば1-10。10失点したことは指導者として本当に考えなくてはいけないことであった。十勝としては予選の中でかなり走ったゲームであったが、それ

4位リーグ VS 京都山城 0-1 負け 【天候：晴れ ピッチ：人工芝】

順位リーグが始まった。予選4試合の課題をベースに、残り2試合相手に向かっていくぞという強い気持ちをもって臨んだが、言い訳に過ぎないほどケガ人や体調不良者が続出した。相手より攻撃チャンスやボールを保持しつつも、最後のラストパスやシュート精度に欠け、何より連続したプレーが少なく、一人一人がバラバラに攻撃している状況であった。また、パスを出して関わることやボールを追い越していく動きが非常に少なく攻撃が単調であった。シュート本数だけでいくと相手の2倍であったが、最後まで決定機を決められず0-1で敗戦。試合後、関西遠征最後の試合に向けて、一人ひとりがバラバラになるのではなく、疲労がたまっている中でもやれることはあると再確認し、切り

4位リーグ VS 京都北部 5-1 勝ち 【天候：晴れ ピッチ：人工芝】

本遠征の最終試合ということで、疲労はピークに達していたが、総力戦で戦うことを確認した。そして遠征中に「個」としてどれだけトライできたかを促し、ゲームに臨んだ。試合前に行ったゴール前の崩しのアップが早速プレーに表れ、幸先よく先制した。相手コートでボールを奪う回数も劇的に増え、人もボールも動いて連続得点につながった。疲労困憊の中とはいえ、選手一人ひとりが遠征ラストの試合だという強い気持ちをもって臨んでくれた結果、前半を優勢に進めることができた。後半もメンバーを続々変えて、ケガ人以外は全員出場して、最後までゴールを見てプレーし続けてくれた。後半終了間際にコーナーキックが立て続けにあり、そこからヘディングで2得点追加することができた。5-1で勝利し、遠征最後のゲームを良い形で締めくくることができた。スコアだけ見ると、相手との差がかなりあった感じに思えるが、技術的にもあまり差がなく、どのような試合展開になるかわからなかったが、選手一人ひとりが、最後まで自分のストロングで勝負しよう、自分の課題にトライしようと、プレーを連続させた結果が勝利につながったと感じる。15チーム中11位で大

「関西遠征の課題」

守備の理解

守備の局面では、今回「ハイプレス」をコンセプトにして臨んだが、FWだけがただ前から行く守備がハイプレスではなく、ボールに対して全体をコンパクトにして、それぞれの立ち位置を明確にした中で、FW中心に前線からハイプレスがかけられることを指導者自身が理解し、選手に落とし込まなければいけない。まずは各試合で奪い所を明確にすること。相手の体の向きやボールの持ち方、相手の攻撃の起点はどこなのかをより明確にしたうえで、ゴールに直結されないようにボールを奪わなければいけない。前線の守備、中盤の守備、ゴール前の守備の違いを理解する必要がある。京都サンガや滋賀県、京都府と対戦した時には、とくにゴール前の守備で軽率な守備が目立った。試合を重ねるごとに、本遠征でもハーフタイムや宿舎でのミーティングでゴール前の守り方を伝え、最後の試合は前線、中盤はもちろん、ゴール前の守備が少し改善が見られた。しかしながら、大量失点した試合もあり、今後のサッカー人生に守備の原理原則を明確に伝え、実践していく必要があると感じた。

アタッキングサードの崩し&フィニッシュの精度

大会を通して、6試合で10得点をとれたが、1試合平均すると1.6点ほど。シュート本数や攻撃回数では相手より上回っていても0-1で負けた試合も2試合あった。内容以上に数字という結果に表すためには、相手ゴールに迫るアタッキングサードでの質の高い崩しが必要となる。言葉では簡単にラストパスの精度やフィニッシュの精度といえるが、トレーニングを通して選手に身につけていくことが重要である。相手守備が高い強度の中で試合が行われたため、パスを出して終わったり、ボール、人自体を追い越していく動き、ダイレクトプレーも少なく、いわゆる個人戦術の部分でのミスや理解不足、何より連続したプレー回数が少なかった。また、ゴールを見た中でのプレー選択も足りず、前を向ける選手が少なかった。相手のギャップに立つことや相手のギャップを見ること、相手のギャップに運ぶことを恐れずにプレーすることで局面局面で光も見えた。相手守備のプレッシャーに負け、バックパスや横パスを選択してしまう選手が多かったため、ボールをもらう前を見ておける場所（左の）を明確にさせることができれば良かった

今回の遠征で初めて監督という大役を担い、多くの事を学ぶことができました。選手も普段とは違うレベルで自分の課題が見つかり、とても良い経験になったと思います。保護者の方々もとても協力的で温かい言葉をたくさんいただきました。選手のサッカー人生はこれからも続きます。まずはサッカーを理解し、スペシャルな選手になることや自分のストロングを伸ばしスケールの大きな選手になってほしいと思います。最後になりますが、改めまして、各チーム指導者の皆様や各関係機関の皆様、保護者の皆様に深く感謝の意を表し、レポートのまとめとしたいと思います。本当にありがとうございました。